漢字の神話

すいせんのことば

国語問題協議会理事
画家　林武

日本の敗戦後、アメリカ司令部の國語簡易化の指令は、内閣の訓令告示による漢字制限、新かなづかひ等々の強制により所謂進歩的と称する実は実利的低調な勢力えに加はって、日本傳統蔑視の風潮は日に増した。

國語は実に何千年の歴史につながる民族の生命であり生き物である。吾等はえによって近代國家を形成し先進國に伍した。

本書の著者は小學校の一教員であるが、日本の児童が自然に漢字を求めてゐる純真白紙の向學心を観し、文部省の教育規制を守らず、児童と共に歩み乍ら小學六年間に二〇〇〇

字（規制では八八一字）を習得さす事の可能を実験した独特な漢字教育法を編み出し、低く安易につかんとする 國語教育界に大きな問題を提起した事は顕著である。

本書は石井勲氏の信念による漢字教育の因由をなした、漢字の原義をつきとめた天才的直観の書で極めて科學的、哲學的で、劃期的な書だ。

（原文のまま）

すいせんのことば

国語問題協議会理事

癌研究所々長 吉 田 富 三

この本の著者は、戦後の國語問題の混迷のさなかに、信念によって、特に小學校の國語教育に挺身され、漢字で出来た言葉は、最初から漢字で教へる教育を実践された。私はその見識に尊敬の念を抱いてゐる。

同じ著者の「私の漢字教室」に次のような挿話がある。小學一年生に「動物園」を漢字で示し、動、物、園の文字をそれぞれ説明し、生き物で動くものを「動物」といふのだと教えた。やがて子供たちの中から、それではアリもキンギョもカヘルも、みな動物かといった質問が次々に起こった。最後に、それなら人間も動物か、と質問に立つ子供が出た時に、その通りだと答へる石井先生の眼には、涙が溢れてゐたといふ話である。

この新著「漢字の神話」によって、こんどは大人たちも、漢字を教えられ、考えさせられて、やがて國語國字の百年の論議が、廣く國民の中に、その大道をひらくことを切に念願する。本書を推薦する所以である。

（原文のまま）

漢字の神話を推薦する

戦後、青少年の國語力の低下が指摘され、特に漢字を知らないといふ批判が起こってから、すでにかなりの年月が経った。かういふ事態を招いたのも、元はといへば戦後に強行された当用漢字や現代仮名遣などの一連の國語政策に原因があると思はれるが、一面ではそのために世間の関心が漢字に向けられるやうになった。

大体、漢字を非難する意見は随分昔からあるが、それにも拘らず、漢字は仲々幅を利かせてゐる。勿論、明治から大正、昭和に至るまで、普通に使はれる漢字は次第に減って来てゐる。そして戦後、当用漢字が制定されてから一層その傾向は甚だしくなってゐる。併し決して漢字はなくならないし、仮名やローマ字の文章が増えもしない。それどころか、一八五〇の当用漢字では絶対に間に合わないのが実情である。漢字は将来なくなるだろうとか、本圏の支那でさえ漢字を廃止しようとしてゐるのだから、日本も廃止しないと世界で唯一の漢字使用國になるぞとか、警告して下さる向もある。よその國がどうしようと構はないが、実際はさうなってゐないし、最近ではむしろ漢字の価値が再認識されてゐる位で、少くとも現在生きてゐる我々や次代を背負ふ子供達も漢字を捨て去ることは、到底考へられないのである。

漢字は難しいといふ論がある。私は世界の文化語、例へば英語やフランス語の綴りに比べて、特に難しいとは思へない。併し難しからうが易しからうが、必要なものは覚えなければならないのである。

しかし従来、漢字の学習法に関しては見るべき研究もなく、進歩もなかった。これを遺憾として、著者は本書を著して体系的な学習法を発表されたのである。ここにいふ体系的学習法とは、漢字をその構成要素に分解し、分類して、それぞれの基本的意味を明かにし、

漢字を連繫させて証明することによって、記憶に便利なようにまとめたものである。その内容は、近来進歩した漢字の原始形や原始義に関する研究に負ふところがあるが、著者独自の研究も多く含まれる。従って、多少問題の部分もあらうが、要するに記憶に役立ち、未知の文字への手懸りを与へるのが主眼なのである。但し当用漢字の新字体が、この効果を十分に発揮し活用することを妨げてゐるのを私は遺憾に思ふ。

著者石井君と私が相識ったのは、もう十年ほど前のことである。石井君は戦後高校の教師となったが、生徒の國語力に不満を抱くとともに中学の教育に疑問を感じて中学の教師となり、更に転じて指導主事となったが、根本的には小学校の教育に問題のあることを知って、自分考案による國語教育実践の場を求めて小学校教師となった人である。私は先ず同君の教育と真理追及に対する情熱に敬服した。次いで同君の主唱するいはゆる石井方式の教育に感嘆した。いはゆる石井方式とは、「一般に漢字で表記される言葉は小学一年生から漢字で教える」といふことを基本とする方法で、私は同君の研究授業を数回にわたって参観した結果、その効果を十分に承認したのである。（詳細は同君著「私の漢字教育」黎明書房刊参照）。

およそ石井君の主張の強みは、すべて実験済みであることにある。私は石井方式の教育が広く実施研究されることを切望するが、少なくともこの書によって漢字に対する認識を新たにされる方の一人でも多くなることを期待して止まない次第である。（原文のまま）

昭和四十二年七月三十一日

東京大学教授文学博士

宇野　精一

まえがき

「漢字はむずかしい」と、だれもが言います。私も、それが嘘だとは思いません。しかし、それにもかかわらず、私は、十数年にわたり、「漢字はむずかしくない」ことを主張し続けてきました。これは、矛盾したことのように思われるでしょうが、決して矛盾ではありません。

何だってそうですが、同じことでも、やり方ひとつでむずかしくもなり、やさしくもなるからです。今まで、漢字が難しいと言われてきたのは、漢字の正しい学び方をだれも教えてくれなかったからです。さらにその原因を尋ねると、その研究がだれからも顧みられなかったからです。

私自身、大学におけるある時期まで、漢字ほどやっかいな、面倒なものはない、と思っていました。ですから、私には、読むことはできるが、書けない漢字が多くて、「漢字なんて無用な存在だ。かなで十分に用が足りる」などと、うそぶいていたものです。

大学二年の時、岡井慎吾博士について、「説文（せつもん）」の講義を受ける機会を得ました。説文は古来難解な書物として、その講義のできる先生は世に少ないと言われていました。岡井先生は実に、世に類いなき先生であったのです。私は岡井先生の講義を聴いているうちに、漢字の構造の妙に惹きつけられ、先生のお宅まで訪問して教えを受けるほどになりました。

説文は、恐らく世界最古の「字典」でしょう。世界における紙の発明は、西暦一〇五年、後漢の蔡倫による、と言われていますが、説文の著者許慎の歿年は、これに遅れること十六年の一二一年と見られています。説文は当時の中国で使用されていた九三五三字の漢字の持つ意義用法を、その字の構造から分析し、解説したものです。当時としては実に感嘆すべき「大字典」です。

ともあれ、一八〇〇年以上の昔の字典ですから、難解なのは当然です。しかし、岡井先生の導きで、この書物の読み方が一応飲み込めるようになりますと、ほんとに寝食を忘れて解読に耽ふけ るようになり、漢字の原始の姿のおもしろさ、また、漢字全体の構成の妙をしみじみと楽しく味わったものです。そして、いつの間にか、漢字を書くのにも少しも苦労しない自分になっているのに気づきました。

漢字は、その成立の過程からして、縦に横に深い関連を保ちつつ、体系的に創作され発展していったものです。それは、地上の万物がそれぞれ深い関係の下に存在しているのを、そのまま反映している文字だからです。だから、そういう漢字を何の関連も考えずに、一つ一つばらばらに切り離して、学習していったのでは、理解しにくいのが当然です。いや、理解しにくいだけ ではありません。せっかく苦労して覚えても、その記憶を保つことができません。これでは、「漢字はむずかしい」と嘆くのが当たり前です。

これに反して、漢字の構造を理解して、体系的に学習していくならば、ちょうど網の真中を持って引き上げるようなもので、関連のある漢字がひとりでに理解でき、しかも、それがお互いに支え合って記憶を保つことができるのです。私が、「漢字はむずかしくない」と言うのは、こういう学習をすれば、やさしいということなのです。

昭和二十六年、私は、東京都の一角で指導主事という仕事をしていました。それは、小中学校の先生方の相談役というような仕事でした。そこで先生方から訴えられた悩みの最大のものは、「漢字が読み書きできないために、あらゆる教科の学習が妨げられている」ということでした。「どうしたら漢字力を十分に養うことができるか」と私は、研究課題をこの一点にしぼり、〝漢字の科学的な指導体系〟を作ることに努力しました。

昭和二十七年十一月十七日の朝日新聞の東京都下版に、四段抜きのトップ記事として、

児童の言語生活を豊富に

「漢字教育が必要」

――八王子教委石井主事近く研究成果発表

という見出しの記事が掲載されました。しかし、私の考えを実行に移して みようという先生はありませんでした。そうだ、自分でやってみなければいけない。机上の空論ではだれも信用しないのがあたりまえだ。そう考えた私は、小学教師になる決心をしました。

旧制高校の教員免許状しか持たなかった私は、新たに小学校教師としての勉強をし、その免許状を取って実施に第一歩を進めたのは昭和二十八年の四月でした。以来十四年間、この三月末に退職するまで、研究と実践を繰り返してきました。その結果、はっきりと分かったことは、

一、小学校の一年生は、今の十倍量の漢字を学習することができる。

二、小学校の三年生までに、今の中学生程度の漢字力をつけることができる。

三、漢字の体系的な学習は、思考力を高め、推理力を増し、他教科の学習にも役立つ。

ということでした。

今の若い人は、と言うと、まず〝書く力〟の弱いことが、だれからも指摘されます。漢字を記憶だけに頼って学習させていたのではむずかしいだけではなく、頭脳の正しい発達が望めません。

私の提唱する、〝漢字学習法〟は、人間の知的理解と情的興味との両面に立ち、やさしく、楽しく学習できて、しかもそれが一つの能力として他のあらゆる学習の上に役立つものです。ぜひ、正しい漢字の学び方を体得して、高い読書力をつけ、正しい文章が書けるようになって頂きたいと思います。本書は、きっとその役に立つことを信じます。

石井勲

昭和四十二年七月二十五日

あとがき

昨年（昭和四十一年）の三月四日、朝日新聞は、「石井式を考える」という表題の社説を掲げました。その中で、次のように論じています。

国字国語問題は、この二十年間、大きな改革の波をかぶった。人によって、それを混乱と言い、百花斉放というが、ともあれ、二十年間の実績と体験とは、この問題にいくつかのレールをしいたことはたしかである。そして、それらの一つに、遠い遠い将来は別として、われわれの時代においては、やはり「漢字、カナまじり文」が原則であるということと、それを現代の機能化された社会に、どのように生かし、かつ適合させるか、ということが大きく課題として浮かびあがって来ている。

（中略）

しかし、一方においては、それらの結果として、若い人たちの国語力の低下が叫ばれている。「やがて漱石や鴎外が読めなくなる。いや、現に読めなくなりつつある」との声は、しばしば耳にする。新装の各種文学全集が、原文を新カナ、あるいはよりわかりやすい言葉づかいや、ルビ付きなどにしているのは、現代が、国語問題の点から見る時、過渡時代にあることを物語っている。

国字国語の能率化、簡素化と、伝統的な文化遺産としてのそれとの間に、いかにして調和と均衡を保つか。今日の国語問題はそこに焦点をしぼることができよう。そして、いわゆる〝石井方式〟は、この問題解決へ、一つの考える素材を提供しているように思われる。

このような書き出しで、〝石井方式〟のねらいや効果について紹介し、国字国語問題に

ついて、国民的体験を生かした「現実的な処理」を要望する、と言って八枚にわたるこの論文を結んでいます。

私が、いわゆる〝石井方式〟を提案したのは、昭和二十七年の全日本国語教育協議会の席上でしたから、それはもう十五年も昔のことになります。その後、昭和三十六年には大岡昇平、山本健吉、福田恆存の三先生によって世に紹介され、昭和三十九年には吉田富三先生によって、国語審議会に、「石井方式を国として検討すべきこと」が提案されました。

このような多くの先生方の御援助にもかかわらず、〝石井方式〟が教育の現場では一向に取り上げられない時に、朝日新聞から、社説として、この問題の重要性を指摘して頂けたことは嬉しいことでした。

この一年間に、石井方式を実施する学校はふえました。とは言え、それはまだ一万分の一にも当たらない数でしょう。しかし、世の流れが今変わりつつあることは、はっきり感じられます。国字国語問題の重要性、とりわけ、漢字教育の重要性は、政府でもはっきりと認めており、強力な施策がほどなく 実行されることと思います。この時に当たって、本書が刊行され、広く利用されるならば、国字国語問題における憂慮すべき今までの状態は、一挙に解決されるでしょう。

国字国語問題は、どこの国においても重要な根本問題とされています。 国語教育は、どこの国においても、最も重視されている教科です。どんな教科学習でも、読み書きによらないでは進めることができないからです。すぐ れた読み書き能力により、あらゆる学問が能率的に進められるのです。その鍵となっているのが、わが国では〝漢字〟です。この〝漢字力〟を養うのが何にも増して重要先決であるのに、これを怠っていたのは愚かでした。

世界的な数学者として有名な岡潔先生は、漢字軽視の今までの風潮を大変に心配なさっ

石井　勲（いしい・いさお）

大正八年，山梨県甲府市に生まる

大東文化学院にて6年間漢文学を学ぶ

初め高等学校に勤務，次いで中学校に移り1967年3月まで14年間，小学校に勤務，石井方式の実践と発表に努めた

現在は，大東文化大学講師，東洋研究所研究員。国語問題協議会の理事として，国字国語問題に取組んでいる

漢字の神話

© 1967年
検印省略

320円

昭和42年12月15日第2刷発行
著者　石井　勲
発行者　宮川　堯
印刷　同興印刷株式会社
発行所　（株）宮川書房
東京都千代田区永田町2の10の2
TBRビル401号
電話（581）3830　振替東京67857

ていらっしゃいました。「こんな貧弱な漢字力では、数学はできない」「こんなことでは、日本の文化は滅びる」とたびたび警告されています。幸い、本書によって、学生諸君はもとより、広く社会人の方々も、漢字力を養って下さるならば、わが国の文化発展のために、これほど喜ばしいことはないと存じます。

著　者